



発行所
青山同窓会
新潟市関屋下川原町二
新潟高校内
印刷所 オリオン印刷株式会社

あけましておめでとー ございます



青山同窓会会長 鍵富清一郎
今年もみなさんにとってよい年でありまうに、健康で、楽しい年でありまうようにお祈りします。

青山同窓会総会

幹事長

50回 上村光司

青山同窓会の昭和五十二年度総会は、七月十五日(土曜)午後四時から、新潟市万代橋東詰の例の「香港」で開いた。集まるもの、前年をやや上回る七二〇人。ただ目ごろ人のうらやむ健康児の鎌富会長が、思いがけず病いにとりつかれ、「あいさつだけでも出席するぞ」と闘志を見せるのを、他の役員に押しとどめられて無念の思いをされたのが、点睛を欠いた。会長に代わって鈴木正二副会長(三十七回)が議長となり、予算



業務報告とも全会一致で決定、承認を得て懇親会に移った。阿部藤策副会長(二十八回)の松みどり。姉に劣らぬ女つぼさで

客席の間をめぐって歌う。さて一緒に歌いましようといふ誘いをかけたがカラオケ・バーの名歌手数あるはずの我が同窓、どうしたことか名乗り出るものなし。君知事と川上新潟市長が、人身御供にされたような表情でステージに上がる。ただ四時半すぎでは夏の日がまだ高すぎて、実力は発揮されぬままに終わったのが残念ではあった。望外のこの一つは、塩沢の雲洞庵の新井石龍禪師(十八回)が駆けつけてくださったこと。八十九歳と思えぬ筆措、口調で簡潔に所感を語られた。恒例のいりどりとなった抽選はボケット・ラジオ(広川電気商会のお世話による)。当選率は相当いいはずなのに、期別に幸運・不運の差が現われて、嘆声の交錯するもの、また是非もなかった。早稲委員長はじめ、実行委員の各位、ご苦労さま。

随想 手紙

校内幹事
60回 上杉雅之

大学受験を間近に控えた教え子の激励もかねて書いた年賀状はどこに眠り、どこを舞っているのか。自分の送った葉書が果たして届いたかどうかという不安も晴れぬうちに、昭和五十四年となった。こんな年頭を迎えてふと思った。手紙といえる手紙を書かなくなつてから何年たつたらうと。

「若し勤務時間を削いで大学院の聴講生となれるなら、頑張つてやってみなさい。記者は慣れで記事を書けるが、それだけに知的貧困は恐ろしいものだから」
「病気はもうとても良くなりました。二度と三週間も入院するようなことはしたくないものです。肉体的苦痛もさることながら、あの精神的あせりはいやですから」
S新聞社に勤める教え子からきた手紙と、その教え子へ入院生活後書き送った手紙の一節である。人から人へ宛る手紙、それは強烈なコミュニケーションである。その手段をここ数年、私は全く使っていないのである。東京にいる教え子からは電話がかかってくるようになったのである。電話での会話はドライである。よし、君にやれる自信があれば聴講生になつてみるよ。病気の方は相手の声でそれとわかるのである。
手紙は生活の記録であると同様に、自分が自分に語れる場でもある。それをいつの間にか忘れてしまっている。電話で話すことは話す側も聞く側も大半は忘れてしまふ。それに、心のヒダの音が伝わらないのである。
いつのまにか郵便箱をあける時のあのスリルに似た気持ちを感ぜなくなつてしまつた。どうせガス、電気代の請求書か、通信販売のやけに重い封書に決まっているのだから。こう思うと、手紙を持っていない自分は、大切なものを失っているのだと気付くのである。

元校長

磯幸次郎氏逝去



昭和53年7月21日午後2時40分
老衰のため浦和市の自宅で死去された。86歳。

本校創立以来、歴代校長のなかで最も在職期間の長かつた校長でありました。昭和17年3月から昭和30年3月退職するまで13年間、本校発展のため尽くされた。大正5年秋田県立本荘中学校教諭をふり出しに昭和30年本校校長を退職された教職生活の約三分の一は本校に在勤されたわけである。本校の発展は、磯幸次郎先生なしには考えられない。
以下その業績のあとをたどり、深く敬意を表したい。
(1) 太平洋戦争が勃発して間もない昭和17年新潟中学校長として着任。当時校風は沈滞し、校舎は疲弊の極に達する中、明朗・剛毅な人柄の育成に専念するとともに教育環境の整備に大いに力を尽くした。着任の昭和17年が創立五十年に当ることを契機に、校風の刷新に努め面目を新たにしたい新潟中学校の誕生といわれる程、学校運営に成果をあげた。
(2) 昭和24年、新制新潟高等学校の発足にあわせて、新校章を制定同27年には創立六十周年記念式典を挙げ、新校歌を制定し、新校旗を樹立し、名実ともに、新制新潟(次頁につづく)

(前頁よりつづく)

高等学校を古い伝統と新しい息吹きの流れの中に創造したといつても過言ではない。

(3) 通信制課程の設置とその発展に尽力。

昭和23年、通信制教育の開設に尽力し、恵まれない生徒の勉学意欲に報いるとともに全国に誇る本校通信課程の基礎を築いた。

(4) 火災による焼失校舎の復興に献身的な尽力。

昭和29年の火災で校舎のほとんどを焼失、歴史ある校舎、充実してきた図書館蔵書、教材、教具など大部分が灰燼に帰してしまつた。

焼け残つた体育館の改造とバラック教室を急造し、二部授業を開始、非常の事態に際し、職員・生徒・同窓をうって一丸となし、青



＝旧校舎 正面＝

山精神の高揚をはかり、物心両面にわたる復興の難事業を意図し、大いにその成果をあげた。

13年間勤務した学校の校舎焼失

した。一方復興期成会を結成し、同窓・PTAその他関係者の力を結集し、非常な努力によつて資金募集をすすめ、現在の鉄筋校舎の建築の基礎をつくるともに設計に当つては、学校の大きな将来計画の構想をたて、特に図書館や体育館の建築に意を注いだ。

かつて大正14年に東北帝国大学在学中に高等試験行政科試験に合格したわけであるが、官界に進むことなく、大正5年秋田県立本庄中学校教諭をふり出し、昭和30年新潟県立新潟高等学校長を退職するまで39年の長きにわたつて教育の道一筋に生き、多くの人材の育成と立派な学校運営にその生涯を捧げたことは特筆大書すべきものである。

尚、磯校長は長年の教育に対する

波乱万丈の十三年

磯校長のエピソードなど

第十九代校長の磯幸次郎先生が亡くなられた。着任されたとき筆

者は五年生になつたところ。授業で触れる先生方と違つて、校長は雲の上の存在だつたし、十七歳になるかならぬか少年に、学校運営の苦労や手腕が察し得るわけもない。ただ年譜から少々抜き出し

て、皆さんの記憶を新たにする助けとなり、ご教示もいただければ幸いである。

磯校長の在任は、昭和十七年四月から三十年三月まで十三年。空前であり、おそらくは絶後となる長期記録である。しかも着任の年が創立五十周年、戦局悪化、勤労動員(校舎は兵舎に)、校庭はイモ畑に、敗戦、新学制、昭和二十三年に県立新潟高等学校に生まれ変わり、通信制も開設。そして軌道にのせたとたん、十九年四月四日の校舎炎上にあつた。その波乱万丈ぶりもまた、空前絶後にならう。筆者と同期の「熱血児」の話

の功績により、昭和四十四年、五位に、昭和五十三年には従四位に叙せられた。

(本稿の一部は、新潟高校教頭 早川宏氏にお聞きしました。)

(文責 上杉雅之)

した。一方復興期成会を結成し、同窓・PTAその他関係者の力を結集し、非常な努力によつて資金募集をすすめ、現在の鉄筋校舎の建築の基礎をつくるともに設計に当つては、学校の大きな将来計画の構想をたて、特に図書館や体育館の建築に意を注いだ。

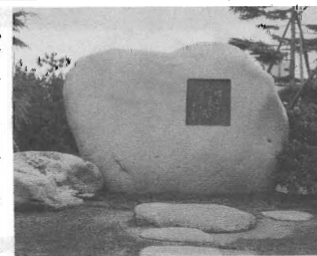
かつて大正14年に東北帝国大学在学中に高等試験行政科試験に合格したわけであるが、官界に進むことなく、大正5年秋田県立本庄中学校教諭をふり出し、昭和30年新潟県立新潟高等学校長を退職するまで39年の長きにわたつて教育の道一筋に生き、多くの人材の育成と立派な学校運営にその生涯を捧げたことは特筆大書すべきものである。

尚、磯校長は長年の教育に対する

坂口献吉さんの詩碑建つ

詩碑世話人 事務局 長 藤 園
38回 近

本紙の前号に私は「坂口献吉さんと県民会館」という一文を載せていただきました。それは県民会



館(美術博物館)の建設に対し古くからその必要性を力説され、その敷地を現在の位置に決めること

に晩年の全てをささげられた大先輩、坂口献吉さんの詩碑をゆかりの県民会館の敷地内に建設することの紹介であり、同窓有志への協力をお願いするためでありました。おかげ様で寄附感銘者数九七六

追悼特集

旧職員金沢祿郎先生は、昨年十一月十七日、新潟市に於て、満九十七歳の天寿を全うされました。以下に、ありし日の先生を偲んで寄せられた追悼の記を特集いたします。

1) 35年前の恩師 金沢先生を偲ぶ

58回 小林 一 男 (関屋中学校々長)

私が中学に入学したのはじめのクラスは五組で、金沢学級であつた。然し、ふだんは温厚なやさしいお今からちょうど三十五年前のことである。当時先生は、六十代を過ぎて過ぎたかなりのご老体であつたが、元氣瀟灑、腕白の多いクラス生徒達のまきしく良き先輩

「右の眼で現実を見よ。諸君はあまりにも深いその汚濁に前進の勇気を失うであらう。しかし若い諸君よ、左の眼で理想の光を追うことを忘れてはならぬ。そうすれば、新しい勇気がわき出ることであらう。」磯校長が残された訓辞の一つだという。

私の中で、ありがたい叱責がとんで来る。ふだんは温厚なやさしいお人柄で、昼食時には、教卓から老人を見渡しながら、眼を細くされて身近な話題を引き出されて、ニコニコされながら話しかけられ、身上相談の相手をよくされた。耳が少し遠いせいいか、生徒の話に耳を寄せられて、なに、そうかうん、うん、と大きな声でうなづか

またまた間を入れず、やや曲がつた腰に力を入れられ、カ一杯の声を

出されて、誰だ！とこで笑つてゐるのは、なぐるぞ！とまたまた

庭で、大きさは高さ一・八メートル、横二・三メートル、碑面は色紙の一・六倍で坂口さんの直筆になる。「地上は美しき哉、心一つで」という詩が彫つてあります。詩碑の写真を掲げ、筆御報告申し上げます。(株)コイ白蟻研究所常務)

（次頁よりつづく）

ほんとうに人生を卓越された人格者としての先生のお姿であった。生物の授業（当時は博物的内容で、独特の新潟弁で名詞調の講義をされた。特に印象に残っているのは板書がいて、筆跡は実にきれいな字体で活字のようであった。植物や動物の図は活版に印刷された図版のようにきちんと書かれる。講義の内容も簡潔に要を得た事項をゆつくりとしかもユーモアを混えてわかりやすく話された。

この頃は、昭和十九年第二次世界大戦の末期で、挙国一致、食糧増産に邁進しなければならなかった。そのために、学校のグラウンドでは、カボチャやサツマイモ畑へと変貌した。授業の中に勤労実習の時間があった。クラス全員グラウンドに出て、鍬やスコップで土を耕し、食糧増産に汗を流した。

＜追悼その2＞ 金沢先生 追弔の記

58回 曾我 浩 (新潟高校教諭)

昭和二十一年五月に転入して来た私は、直接の授業を通して、先生に接することの出来た期間は短かったのですが、別の面でも、いくつかのかわりを持たせていただけな者として、その二、三の思い出を記しながら、先生のご冥福をお祈りしたいと思えます。

あるとき、クラス全員一列横隊に整列し、点呼のあと、作物栽培について精神訓練の一端をこたれた。諸君、立派な作物を育てあげた。その作物に最も適した肥料を与えなければならぬ。最も適した肥料、当時は天然肥料で科（学肥料は使われていなかった。）であるかどうかは、肥料桶に人糞を入れた尿を加え、攪拌棒でよく混合したあとで、指につけてみて味覚を通して判断できるくらいにやらなければ、一人前の作物を育てあげて人にはなれないのだぞ。と思えば三十五年前、老体にもかかわらず、気力と誠実と温情あふれる先生の人格の一端に触れ得た一人として、ときには厳しく、いつもはやさしく人情味あふれる人格に、感慨深し慕情にひたりつ、今は亡き恩師、金沢先生のご冥福をお祈りする次第である。

昭和二十八年、夏も終り頃だったかと思えます。松波町の小路を歩いていた時、ある民家のへい垣から突き出ている低木の枝をこつそりと折り取りました。私にとっては珍しい植物で、接着した二つの赤い実をつけていました。同時に、金沢先生のお宅はすぐ近くであることが思い浮かび、無思慮にも、お宅に直行してしまつたのです。突然の訪問にも拘らず、先生は嬉しそうに迎え入れてくださり、開口一番「もうすぐ卒業ですよ。就職の方はどうかね」と言われたのです。先手をとられ、しかも全く念頭になつた就職のことを聞かれた私は、いささかどきまぎしてしまいました。

同時に、数年間もご沙汰を続け、気まぐれのようにお邪魔にあつた。卒業生を忘れずに居られたことを知って感激するとともに、考えの浅い自らを恥ずかしく感じたものです。もはや、植物のことなどお聞きする必要はなかつたのですが、甘えついでに、例の小枝をお見せしたところ、先生は眼を細められながら「うん、ヒヨウタンボク、ヒヨウタンボク」と大声をあげられ「ほれ、実を見ればわかる。ヒヨウタンだ」といかにも嬉しそうにおつしやるのです。ついでに、それが劇毒植物であることも教えていただきました。ヒヨウタンボクは、実はありふれた植物で、不勉強な私が知らなかつただけなのです。自ら調べたことをせせいに、それにかこつけて先生にお会いしたいという衝動を禁じ得なかつた私を、先生はお見通しのようにでした。

最近のこと 昭和四十五年であつたか、四十六年であつたか、はつきり思い出せないのですが、先生からお葉書を頂戴しました。その頃、鏡濁の水生物という小冊子が巻町双書シリーズの一つとして発行されました。長島義介氏（巻農高）の共著ですが、先生はどこで知られたのか、その出版を祝うという文面でした。私は、このようなときにまで情報を得ておられる先生に驚き、激励の一葉をお寄せ下さつた先生の温情に、またまた感激させられました。すぐに御礼の一筆なりを差し上げるべきところ

＜追悼その3＞

金沢先生 恩師の思い出

58回 岩本 賢雄

恩師金沢沢郎先生の訃報に接し戦中下にあつた私共の青春時代にとつて大いなる慈父として私共を導かれておられた先生の面影を今静かに憶んでいます。昭和十九年の春、戦時色一辺倒の最中に私は新潟中学校に入学しました。一年五組の教室は東校所の脇グラウンド側の端にあり、緊張した生徒の一人として私は初めて中学校の教師に逢うことの期待に胸をときめかせていました。教室に入ってきた坊主頭の小柄な教師、太い縁の眼鏡をかけ瘦身に似あわぬどっしりした足取りの教師、それが私の組主任金沢先生でした。私が頭に描いていた中学教

その機会にお詫びを申し上げつつ、例の小冊子一部を謹呈することが出き、何となく安堵の思いがしました。それにしても、その時から早くも七年の歳月が過ぎようとしているのかと思うと、本当に感無量のものがあります。金沢先生は、私の二倍の人生を充実して歩きました。そのうちの三十年間の折々に、先生の人格の一端に触れることの出来た私は、いま何と申し上げたらよいか。三十年間という時間は永いのか短いのか。先生のあの風格と温情をいま新しく蘇がえらせていると、何とも分からなくなつてきます。

「君方。君方は今日から中学生である。新生でアール。それを忘れるでナイ」大きな声でゆつくり話す先生の口調が三十余年の歳月を越えて私の耳に響いてきます。簡潔にして要を得た話ぶりは、その後の生物の授業でも同様でした。具体的な実例を示し、体験から導き出される講義は、あのホルマリンの匂いのする生物教室とともに懐しく思い出されます。戦時中のごとき先生も戦闘帽にゲートル姿でグラウンドを芋畑・南瓜畑にする指導をされました。私共の厭がる肥液を率先してやられました。これがが蝟式栽培法でアール——校庭に響き渡るユーモラスな先生の声が想い起こされます。腕白な私共を相手に決して怒鳴ることのない先生でした。そして純心なまでの探求心。私共の悪戯に対してもその態度は変わりませんでした。生物教室にある骨格標本と先生の顔を交互に見較べながら「似てるなア」と言った生徒に対しても、先生は口の中でチツと言っただけで済ました。先生、六本指のガマを見付けた」と言う生徒の注進に真顔になつた先生、すかさず「アツ先生、途中で指が一本モゲタ」と言った生徒にも先生は一緒に笑つてくれました。今は皆昔語りとなつて私共の脳裏に焼付いています。卒業後も街で時たまお見かけた慈父の如き先生の元氣な姿も昨日のことのように偲ばれます。今はただ恩師金沢先生のご冥福をお祈りするばかりです。

青山同窓

川上喜八郎

後援会結成

47回 小 俣 辰 郎

第四十五回卒業の川上喜八郎氏が新潟市長に初当選して、早くも四年を迎え、市民の手による住みよい故郷づくりの基盤固めに意欲を注ぎ、二期目実現のため同窓有志に支援を願っております。多くの有志の方々からも声かけが高まり、川上氏の同期生を中心として後援会結成の準備をすることとなり、同窓会事務局において現在把握している市在任同窓会員に広く呼びかけ、後援会結成準備会が去る十一月二十九日、イチムラ百貨店に於て、二五名の参加を



からは、川上市政二期の実現に向けて必勝を期するためには、樂觀ムードを捨て、同窓有志の拡大に青山精神を生かし最善の努力を怠くすべきだ。現段階では、方丈ではなく最終盤まで頑張り、行こうと、戒める力強いあいさつをいただきました。引き続き懇親会に入り、市長の謝辞と決意を述べたあいさつがあり、その後各界で活躍する各期有志の励ましの言葉に移り、川上市長の長男川上耕介氏(第七十四回卒)からあいさつが終った、ころから若々しいグループの合唱、全員応援歌などが飛び出し、最終盤は、援歌会長の音頭で「頑張ろう」を、鍵富会長の音頭で「頑張ろう」を、三唱、会場絶叫裡に全員奮いを深くし散会となりました。

小柳篤二先輩をお訪ねして

60回 小 林 智 明

六十回生の私が、十回生(明治三十六年卒)の小柳篤二先輩をお訪ねしたのは昨年九月二十四日のことでありました。前もって郵便とお電話で訪問のご承諾は得て居ったのでありますが、何しろ九十五歳という高齢のことを考えるとお身体の状態、面談の時間などが気になり、四街道の駅に下車して改めてお電話したら、奥様がいられて「どうぞ、お待ちしています」と、ご丁寧な道順もお教え下さったので、タクシーを拾ってお

訪ねました。千葉県四街道町に、奥様とお二人で住まわれる小柳篤二先輩は、九十五歳とは思われない矍鑠たるお姿で、耳は少し遠くなられたようですが、在学時代は秀才で鳴らされただけに記憶力は抜群で、一時聞かずに互り新中時代のことを中心にいろいろお話を伺ったのであります。お若い奥様(七十七歳)と大変仲睦まじく、いたわり合ってお暮しのご様子で、お子様は無いのですが、近所に四十八回生で

養子同然の甥子さん(新潟鉄工所勤務)が居られるとの事でした。また四街道町の人口は、現在五万三千人くらいだそうですが、その長寿番付では、男の横綱との事でありました。さて私が小柳先輩をお訪ねした訳は、私の所属する会の「いしづみ」という会誌に、同じ十回生の笠原勲の「還郷乞食帖」や「遊妙山記」のことを連載して居りま



したので、その同級生で現在健康在の方は恐らく小柳篤二さんしか居られないだろうとは、かねてより同窓会の岩田さんにお聞きしていた事でした。そこで一度この大先輩をお訪ねして、昔の同級生のことをお聞きしたかった為であります。特に明治三十六年二月に発行された、当時の新潟中学校校友会誌「遊方会雑誌」十二号に発表された笠原勲の「遊妙山記」は、その前年、即ち明治二十五年の夏休みに同級生四人で妙義山に登りし折に、全漢文千五百字ほどの紀

行文であります。同行の他の三人の同級生の事や、その紀行文の末尾に所見を書かれている尾上澤緯という当時の漢文の先生、伊沢緯門のことなどを尋ねました。そしてそれらについては、中学時代を思い浮かべながら、いろいろご教示をいただいたのであります。また同じ漢文の先生で、勲の親父さんであったが為に「ジンツアマ」の愛称で呼ば

うです。建川美次(陸軍中将、敵中横断三百里で余りにも有名、国際連盟脱退の陰の立役者、新中時代は野球部の主将、小柳先輩は捕手をやられた)、七回生の野上俊夫(実験心理学の開拓者、京大名誉教授)同じく七回生の会津八一(早稲田第一高等学院で二十一年から一緒に奉職された間柄)、九回生の青木得二(三年の時に高知中学から転入した秀才、一高、東大を経て大蔵省入り)、人見泰三郎教授(新中五代校長森岩太郎の時の教頭、小柳先輩は代教を教われた、岡山の入、後年東京の府立一中で十一年間教師として一緒に奉職された)などの人々とのことでした。卒業してから早や私も二十七年になる今日、それより丁度半世紀も前の大先輩をお訪ねして、私達が知らない昔のお話をいろいろお聞きすることが出来たその日の私は、これぞ一期一会と思ひ、片言隻語も忘れないようにと心してお聞きしたのであります。小柳先輩

50回同期会

湯沢で

五十回同期会は十月二十八、九日湯沢温泉園荘で開いた。東京―新潟中間地点、湯沢での会合は五年ぶり。そろそろ暇になる年ごろだから、いつでもよからうとタカをくくっていたが、案外というか喜ぶべきことというか、忙し

は終始姿勢よく、大きな椅子に座られて静かにお話をされました。母校の後輩というだけで、心よく長時間のお話を語ってくださった先輩のご厚意と、帰りのお車(甥殿のご子息)やいろいろのお話を聞いていただいた奥様に、紙上を借りまして厚く御礼を申し上げますと共に、益々のご健康をお祈りするものであります。

小 柳 篤 二 氏
〈略歴〉
(昭和五十四年一月三日)

明治十六年八月一日新潟に生る。学歴 新潟中学校、一高中退、東京外語、東大文学部選科、東京府立一中、早稲田大学、東京高校、千葉大学、青山学院大学、武蔵高校、日出国園

著書「新しい独文和訳法」、「独文和訳の根底」、「英語対照独乙文法」他
―日出学園創立四十周年記念誌「松籟記」より―

い連中が多く、駆けつけたものも十二人。最長距離は旭川からの早見(現姓山川)久明君。卒業担任の木村晋先生(味方村長)もお元気な姿を見せていただいた。会合の状況は例によって例のごとく省略させていただきます。

期及氏名	期及氏名	期及氏名	期及氏名	期及氏名	期及氏名	期及氏名	期及氏名	期及氏名	期及氏名
平哲碧正人	明親正雄子之	久智博誠裕一郎	則隆潤耕浩郎	明透一修	一二樹	隆人	隆	宗英	一俊克民正
上倉林井原村	海原藤川村	黒山部井野崎島野	田田泉上藤	惠一秀	信	75回	本	峯	井栗立中丹
川熊小菅菅中	井栗立中丹	石磯今大小藤中	上上和川佐	関田中原	塚堀渡	西	村山	古山	井栗立中丹
久 真弘志司	三光治弘哉	夫弘武徳門	夫穂治功夫	一憲一亨	真郎九子	朗夫肇	爾介一	作子	郎九子
武 勝啓篤幸	采文 英園正尚	左 威瑞隆	英吾真俊	理史文	田口際	68回	原川村	林喜進	中田尾川
浅山藤林	辺村島野村	野田崎	林藤田倉村	尚一	野田山	69回	石山小	佐佐田	敦外
湯 片加小関	田田高高中	中渡矢山吉	安石大岡	君小齊	高仲植星	野田山	原小北	小駒田	原宮源水
郎一子	保夫一雄	仁三夫郎	真介	達樹一雄	治聡子一夫	夫之雄	一明至	彦生平	之美治
次誠美健	利睦義正	愛輝俊妻	敬	良康純修	律淳道道	正重勝正	直正一	富浩信一	尚昌惠和
貫村沢橋	橋野村	田浦本城	田辺崎	63回	部野南泉	田野堀谷	桐藤藤倉	墨沢沢種	田井田
田田滝高	高星中原	町三宮	結和渡山	阿赤浅	伊和薄	江小大	今片齋	佐白相	滝千土
満夫雄三	夫博浩朗	一吉男	介郎	寿子明	啓嗣郎一	嘉介助	一根	男夫三	雄俊司
脇村本	田川間崎	辺田	61回	塚堀田	藤藤垣	野滝竹	井田藤	口崎村	田沼藤
西野橋	浜長福	本山渡	吉	赤栗	伊伊	稲磯大	大石池	伊江川	木岸良
男吾夫	吉茂男	夫司	助教宏	造造	実男一	郎夫行	樹三	駿郎	夫夫行
俊昭利	哲惣 幸祥	幸近	邦修	正康	吉英	敏繁	梯	勝紀	克道重
中橋	浜川島	崎山浦川	崎野田	59回	倍藤塚	十村木	熊野村	見田井	間嶋島
田高	長早福	丸松宮	宮矢行	安伊	飯五	飯牛小	大奥	勝勝	笠数倉
真禪	剛夫男	男男昭	哉人修	榮雄	英雄男	一夫行	雄一	弥衛	純平尋
達 哲寿和	義誠直	助利	稔徳一	輝義	源通知	57回	昌幸	久忠	千玲信
井田	木崎所	々山見	誠直	助利	稔徳一	輝義	源通知	57回	昌幸
高土	常寺富	等中仁	野長保	細前	松三	武村山	和渡	飯井	市今
郎夫	隆三三	夫泰	弥男	二昭	二助	夫平二	夫郎一	二一	昭郎
志和	昭隆	秀義	欣正	堅禎	次昭	長常	正竜	徳義	勝淳
藤井	藤藤藤	藤見	田谷井	保木	口笠	中沢	野波	取川	井井
齋坂	佐佐佐	佐里	塩椎	白真	鈴閔	武田高	津筑	富中	永永
男郎也	司治	郎右	成弥	平明	幹武	弥清	行雄	司夫	一郎
卓一	秀光	源太	左玉	勝治	良雄	善忠	逢勇	秀洋一	健敏
坂田	見村	合洋	広原	田品	々々	谷黒	橋橋	内田	本村
逢岡	勝上	川部	木水	鬱倉	佐佐	波大	高時	寺根	中橋
太弥	男樹	自常	基郎	一	泰資	宏郎	郎治	六彦	通彦一
皓進	保三	明清	由純	亮清	源太	利次	英亀	健	浩正
十塚	坂野	橋川	木嶋	島池	藤訪	口松	城村	崎谷	川瀬
五大大	大大	小楳	川櫛	倉小	近誠	関高	東中	野長	樋広

新谷さんの送別会

野球一筋に生きてこられた新谷昂平さん（二十八回卒）が新濁を去られるという話を伝え聞いた野球関係者たちは「えっ、ほんとですか、どうして?」、びつくりした。新濁中学→新濁南校と母校の野球部を育て、県・市軟式野球連盟理事長として新濁の野球界のために貢献してこられた新谷さん。

その人情味豊かな指導を受け、有名な猛ノックでしごかれたOBたちは多い。また硬式、軟式を問わず、その名ジャッジで試合をさせてもらったチーム、選手は数知れない。

これからも末永く、後輩を指導してもらえぬものと決めてかかっていたところ、他所へ転居されるとは、全く思いがけないことである。「私も、すでに七十六歳。年もとつたし、三重県四日市市に住む倅のところで世話になる」との事情であれば、真に残念で、寂しいことだが、それも仕方がない。

これまでの感謝と、いつまでもご健健で...という気持ちをごまめて野球部同窓会「青山倶楽部」ではさっそく役員有志に呼びかけて、送別会を開くことにした。九月十一日午後六時から、会場は新濁市東大畑の料亭湖畔。急な催しに



青山倶楽部幹事長で日本社会人野球協会員支部理事長でもある皆もかかわらず、出席者は三十六人所用のため出席できないが記念品贈呈には賛同したいと申し出たOBが十五人。主に長老、中堅どころの、新谷さんとは特別にかわりの深いメンバーだった。

川登良夫さん（三十九回卒）の司会で、送別の宴は和気あたたかいうちに進められた。まず、倶楽部を代表して清野準一会長（三十八回卒）が送別の辞。

「私が初めて新谷さんにお会いしたのは、子供のころ、新谷さんが新中のキャプテン、私の叔父が新商のキャプテンで優勝を争ったときでした。その後、私自身も選手として指導を受け、おかげで母校の野球部は強くなった。また、社会人の新濁クラブを結成したとき、総監督としてお迎えし、後楽園へ三回連続出場を果たすことが出来ました。

ただ残念なのは、新中→新高が一度も甲子園に出場していないことです。近いうちに、ぜひ夢を実現させ、甲子園のスタンドで新谷さんと再会したい。

堀保利さん（三十四回卒）は「新谷さんの猛ノックを受けて、いまでも指がよく動かないが、その人柄の温かさを感じた。終戦後は、市体育協会結成の際、大変お世話になりました。どうか、いつまでもお元気であってください。また磯野英男さん（三十三回卒）は「ホームランみたいなノックで、捕れないと怒鳴られ、いやあ、ひどいものだった（そんなにいじめなかったぞー）という新谷さんの弁明に一同大笑。

「おかげで根性がつきました」など、はなむけの言葉。

清野会長から、堆来の花瓶・花台が記念品として、それに餞別を添えて贈られ、新谷さんの「みんなをしのいだ、鬼みたいな私に、

どうも...」のお札の言葉に、また笑い。大塚清さん（三十三回卒）の首頭で乾杯、出席者全員が一人一人立って、新谷さんの思い出話や、とっておきのエピソードを披露した。

最後に新谷さんが「皆さん、忙しいのに、大勢集まってくれて、

ありがとうございます。ほめられたり、けなされたりしたが（みんな、ほめたんですよーの声に）そうか、ありがとうございます（笑い）。なるべく早く、甲子園で会わせてほしい」とあいさつ。母校の校歌と応援歌の大合唱で、大先輩を送った。

（山田一介記）

在京61回生 卒業二十五周年 記念集会

去る（昨秋）十月二十日に、首都圏在住の第六十一回生が、卒業二十五周年を記念して、東京池袋の酒亭に集まりました。

当夜は、新濁からはるばる大黒山平先生、大橋禎助先生のお越しをいただき、かつての紅顔の美少

年（いや悪童共か）美少女の昔に戻り、大いに飲みかっ話に花を咲かせました。文字通り、二十五周年に会った人も多かったようです。第五十八回から第六十回卒の先輩諸兄は青山に六年間も居られ、それに比べ、とくまともがあり、より良くなかったような私共新制第一回も、名簿対象者約六十名中、実に三十七名が参加し、感涙で、幹事役一同としても欣快の至りでした。

又、特筆すべきは、本校最初の



女子高校生である七名のうち、伊藤藤英子さん、山田（藤田）みず子さんが出席し、感涙に更には花を添えた事でした。伊藤さんは東京と

語り切つて、ここに至るまでにはどんなに苦勞も多かったであろうに、と思うと万感交々至つて繰り返して繰り返し心中深い敬意を表していたことでした。ほんとうにありがとうございました。改めて厚く御礼を申し上げます。

あれから驚谷駅近くの親せきの家にとどろつき、遅くまで当夕の状況等を話したりして漸く就寝翌日は九時過ぎに起きましたが、何だかんだで夕方の市川一（現南高）の同窓生には間に合います。そうにもなかつたので「幹事」におわびの電話をして、夜になって漸く帰宅いたしました。帰つてか

大黒先生 よりの お礼状

拝啓 日増しに冷気を感じる昨今ですが、益々活気に溢れて活躍の様子、心から慶賀申し上げます。

さてこの度は、在京六十一回卒青山同窓会が二十五周年に、しかも名簿の過半数参加という大盛況に開催され、小生までが招待を戴いて、この上ない過分のおもてなしや深いご配慮を戴いて、ほんとうに愉快な一夜を過ごさせ

九時過ぎ再会を約束し、校歌を斉唱して散会しましたが、私共の三年生の時に、創立六十周年で、「百里流れて」の新校歌が出来たのですが、皆さまが受験勉強で歌詞を覚えなかつた訳でもないでしようが、期せずして「玲瓏の天あふふ時」の大合唱となりました。

なお、当日の出席者は、伊藤（英子）、山田（藤田）みず子、小林（元雄）、山田（充）、山田（克浩）、貝沼、木田、久須美、中村、佐藤（敏夫）、鈴木（正三）、横村、高橋（駿）、大滝（英嗣）、草間、磯野、伊藤（達明）、藤田（靖）、栗田、相馬、近、加藤（邦雄）、川崎、稲垣、木村、大竹、長谷川（康一）、河井、福島、田中（直）、阿部（徳次郎）、栗栖、大倉、安宅、鶴巻、赤塚（順不）の諸兄姉でした。以上

（六十一回 赤塚記）

らには妻とまた学兄たちのおうわさに花を咲かせ、おそくなってやっにと寝たような次第です。ほんとうに有難うございました。

新濁も冬がもうそこまで迫っているようです。庭の樹々が次第に紅葉が多くなって来ます。

遙かな空から皆さんの御多幸とご発展をお祈りしておりますが、学兄等もよし新濁へおいでの節は是非拙宅までお立ち寄り下さるようお待ちしております。

まずは略儀ながら厚礼申し上げます。

昭和五十二年十月二十三日 草々
在京六十一回生各位
大黒山平

秋たけなわの湯沢で 新中48期クラス会

記録的の猛暑も嘘の様に過ぎ去り、秋風がひやりと感ずる十月七日湯沢温泉東映ホテルで開催した。我がクラス会は隔年市外で開催して居り、今年はその年に当るので、東京方面の方も出席し易い様に東京・新潟のほぼ中間に当る湯沢温泉で開催という事になった次第である。

当日は遙々遠く淡路島より仲野（カタキ）先生をお迎えして開催した。仲野先生は四年前に一回お迎えしたのであるが、再度お迎えした訳は、先生が教師として始めて教鞭をたらされて教えられるのが我がクラスであり、先生にとっても懐かしいと心から喜ばれたので、又のお越しを願った次第である。

当日は東京よりの参加者も四人程あり、出席者十七名お互いに一年振りの再会に話はずんだ。午後六時開宴、大橋明自君の司会開会の辞に始まり、今まではここで物故者に対しての黙祷という所だが、今回は幸せなる事に一人もなく誠に結構な事と思う（お互い年も年なのだから健康管理には充分気をつけましょう）。次いで大塚進弥君より一年間の経過報告、東京在住の同級生の消息が、田村謙二君よりなされた。次に小池清泰



君より長女小池真理子嬢の処女出版（単行本）「知的悪女のすすめ」が好評の中に各地で読まれておるとの感謝の意を含めての報告があった。次いで仲野先生より近況報告を含めてのごあいさつを聞き、本間健四郎君の音頭で乾杯の後、宴に移る。初めは皆、おとなしかったが飲む程に酔う程に昔の悪童にもどり、珍談等を取り混ぜ思いつく話に花を咲かせて楽しいひと時を過ごした。校歌合唱、応援歌を合唱し、五十嵐皓太君の音頭で万感三唱の上、山崎の閉会の辞で宴を閉じ、各部屋に戻り、そこで

又飲み直しながら、親しみの余り激論ともつかぬ談笑に変わり、夜更けるのも忘れて語り合った。仲野先生も宴会中すっかり昔の時代に戻られ、一語に応援歌を唱われ、又宴会終了後も各部屋を廻られて談笑の仲間に加わられて誠に心

渋柿会開催 寄宿舎の悪童共 集まる!!

大正末期頃から昭和五、六年頃まで新中の寄宿舎に暮した者の集まりを渋柿会と言っている。この名前は永井行蔵さんと佐々木勘三郎等が在舍当時、お二人が主となって出された同人誌の名前を「渋柿」と言ったのでつけられた名である。今はまだ渋くて食えないが、やがて熟れておいしい実になるといふあたりからきた名前かも知れない。



の底から楽しそうに、時々懐かしさの余り、眼に光るものをお見受けした。翌日朝食後、来年又体に気をつけて元気で逢う事を約束して散会した。（山崎 記）

三三先生を開いてやったのであったがそれから四年、今回は十月七日、夜六時から田中ホテルで開催ということになった。来賓として当時から学校の書記（事務官）をしておられ、又新中への赴任当時「寄宿舎で食事をしていたという渡部脩治様をお招きした。会員

の出席十四名、一同五十年前の渋柿に立ち返り、秋の夜長をじつくり語り合った。出席者を写真にて紹介します。前列向って左から、内田善衛（35）吉田町、元中学校々長、丸山英二（36号板町、歯科医、佐野賢一）（33新潟交通専務、永井行蔵 33）日本歯科大教授、吉川恒吉（36元会社々長、丸岡寛（36水原町開業医、中列、富所太三郎（36吉田町 県農協中央会副会長、川村欽治（33元第四銀行重役、渡部脩治（元母校事務官、後列、近藤百之（35相模原市元高校長、村山勇一郎（37新潟市議）、河内正彦（37中条町開業医、山田利平次（36元新潟市市政部長、杉本賢根（36旧性小池、加茂市開業医、近藤円（38会社役員）（M・K・生）

思い出

23回清水浩一

自分はこの頃、ふつと若かりし日の友の顔が目浮かぶことがある。するといつしかその頃の若々しい気分が身のうちに湧き上がって、ほのぼのと若さにひたるひとときが与えられる。その一つを語

明治天皇の御不例。弥彦神社で御平癒祈願に、新潟中学各クラス代表の一同が神前に額づいていりる。その中にも小林享作君の姿がある。六十年後の今もそのままの目にある。

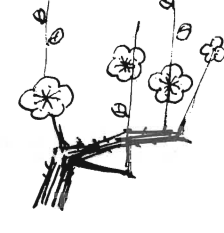
一年から五年まで乙組で通して、主任岡村（タコ）先生の膝下で、きびしい躰をされたことがお互いあどとまで幸したと思う。

君ほどの学科も優秀であったが、特に英語が得意で小黑（シライヤ）先生や、中山（トムロー）先生の信頼を一身に集めておった。英語が二ガテの僕はどれほど君の援助を仰いだか数え切れなかった。

寒いさむいシベリヤおろしの吹雪きまくる土曜日の夜、長マントを羽織って新潟町の君を訪ねるために、琴平さんから橋を渡つてうす暗い掘端をテックつておると、突然「あーんたいあーんたい」とあやしい女にマントを引つ張られビックリさせられたことがあつて、以来その辺りは小走りで通つたものだった。お宅では、貴重な体験談に華が咲いたり、数々の有益な図書を見せていただいたりして時の経つのを忘れた。当時礎校の生徒で優しい妹さん（後の先輩、故赤井博士夫人、現赤井博士の母）の綴りや、図画のすばらしい成績物を頂戴して帰つたこともある。

これは自分が五、六年担任の教生だった関係で大切な資料であった。又元氣な弟の（一三氏、元県教育委員、現県社会教育委員長）が顔をだされた記憶もかすかに浮んで

きて心温まるものがある。君は純情あふれる人柄で、僕が五年の終り頃、重い気管支カタルで、学校町三の下宿（秋山）に臥しておった時、毎日帰り途に立ち寄り、枕頭でその日あった授業のことや、学校の模様など細々と知らせしてくれ、且つ激励してくれたものだ。あの姿はほげきまなながらに、喉に焼きついてる。卒業して、君は得意の英語で堂々天下の難関東京高商（今の一橋大）へ。僕は父の命で新潟師範へと別れわかれになったが、いつも巻紙墨書の封書で東京での生活を知らせてくれた。君は一橋を卒業して、財界の巨魁三菱に入社。そして九州若松の支店に赴任して帰郷された時、曰く「清水君、僕は、坊主頭のままで赴任するよ。そうして、ひげをはやした連中を使うんだ。面白いじゃないか。ブー」と坊主頭で。努力精進を積み重ねて将来に備えるつもりだ。ゆっくととま。まあ、見ていてくれ給え。君も元氣で県下の教育をたのむよ。と元氣な声で笑つて語つた。それが告別の詞となろうとは……。今も尚、感無量のものがある。生き残り思い出せる顔の難



46回生報告

プレ四十年 記念同期会

我期は昭和十四年卒であるから卒業後数え年で四十年であるが、楽しい事は早い方がいいという事で、例年の地味な会合から一転して盛大にやろうと決めたのは初秋の某日、高校校長会合から一転して、例年の地味な会合から一転して盛大にやろうと決めたのは初秋の某日、高校校長会合から一転して、例年の地味な会合から一転して...

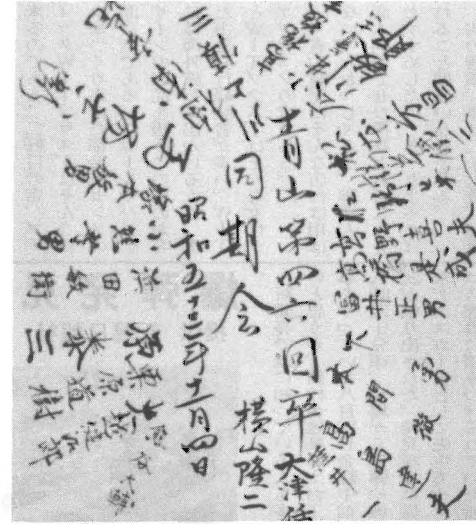
彦彦社へ。参道や境内は有名な菊花展。神社では結婚式。杉並木の後背の山は紅葉。と秋の情緒を方喫し乍ら昇殿、お神楽を奉納し玉串を捧げて故人の冥福と生存者の前途多幸を祈念する。

残惜しく解散をした次第であった。我期は至卒業者の中、不明は僅か十名余りと名簿は完全に整備され、数年に一度は近況集も発行されて実によくまとまっているが、残念な事に市周辺に居り乍ら未だ一回も出席しない人も多い。今回...

友を迎える 清気晩秋 岩室の宿 湯はコンコンと湧き 巷塵を流す 昭和五十三年十一月九日 横山隆一記

Table with financial data for 昭和52年度 and 昭和53年度. Columns include '収入の部' (Income) and '支出の部' (Expenditure) with sub-columns for '科目' (Item), '決算額' (Final Amount), and '備考' (Remarks).

収支差引残高 404,270 (次年度繰越) 昭和53年5月11日 上記の通り相違無いことを確認致します。 監事 福山 健 監事 沢山 巖



恒例2日に 山岳部OB会 新年会開催 三千数人出席の山岳部OB会は恒例の一月一日に市内の「つね川」(古町八)で行われた。山岳部は旧制時代にもあったようであるが一時とだえて、新制になってから再興されたが、それから数えても...

今年ではほぼ二十五年目になる。今大学在学中の若いOBから、四十歳をこえたOBまで、かつての顧問の飯塚、片岡、両先生を囲んで和やかなひとときを過ごした。一昨年からの昨年にかけて、結婚した者も数人あり、うらやましながら...

Uターン変り種 (その2)

齊藤 綾嬢の場合

ブティックW-I-T経営者

万代シテイの中心、三越エレガンスの丁度真向いにしてやれたブティック「W-I-TプラスI」が店開きしてやがて三年目になる。今回そのブティックの女主人、齊藤綾嬢に御登壇願うことにしよう。

祖父の代からメリヤス問屋だった齊藤家の長女として生まれた綾嬢は、新潟高校卒業後、東京経済大学に進学。学園生活中は専門の経済学よりも、日本史に興味を持って、色川大吉教授に傾倒。一時は日本史の研究で更に大学院へもと思つた程だったが、郷里の両親がUターンを希望、説得より行動をと、娘に経営させる店を用意された。バスセンター一階にあるブティックW-I-Tがそれである。

「娘を郷里へ」のこの両親の作戦に抗することが出来ず、綾嬢は何の未練もなく新潟へ。彼女の経営者としての野心は、「女性ファッションの北限の地」新潟で燃え始めた。母校在学中は美術部に所属していた彼女(油絵は趣味の域を越えプロ級とか、持ち前の美的天分を生かして独創的なインテリアの雰囲気をつくりあげた。

「何事につけても保守的な新潟の女性、特に若い女性の美的感覚をファッションの分野で啓蒙したい」というのが経営方針。

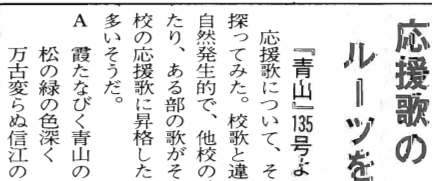


「例えば、スーパードライエーには安価なドレスは多い。しかし選ばれたものを選ばれた人たちに着て欲しいと思う。最近の職業を持つ女性が多い。昼間の仕事を他に、レジャーや夜の生活をエンジョイするためのおしゃれを楽しんで欲しい。美貌を誇る綾嬢(在学中は「ミス新高」の名をささやかれていたとか)の顔もファッションを語る時は険しくなってくる。「お客さんに売ることだけを考えたお客さんにくつろいでもらえぬのは商売の邪道です。お店にきたお客さんにくつろいでもらえぬに気軽に寄つていただけるような店にしたい。」そのために彼女は月に一度は必ず上京して新しい知識と感覚を身につける勉強をして来るのである。二軒目の店、ブティックW-I-TプラスIはそんな彼女がつくりあげた都会的センスの漂う店である。ワコールやパリエインの商品を扱うこの店のお客には海外旅行経験者が多い。W-I-TとW-I-TプラスIはそんな女性ファッションの店である。

「青山健児はそんな店には用はない」とおっしゃる。御婦人、恋人同伴でぜひ探訪されることをおすすめしたい。きつとよろこばれること間違いなしである。

当の綾嬢、年は二十七歳、健康そのもの。女性ファッションに情熱を燃やすす経営者ではあるが、やはり女性、結婚が最終の夢とか。相手を求めている青山健児諸氏もぜひ乗り込んでみてはいかがでしょう。気力、体力それに男らしさ溢れる男性を物色中とのこと故。

(上杉記)



識と感覚を身につける勉強をして来るのである。二軒目の店、ブティックW-I-TプラスIはそんな彼女がつくりあげた都会的センスの漂う店である。ワコールやパリエインの商品を扱うこの店のお客には海外旅行経験者が多い。W-I-TとW-I-TプラスIはそんな女性ファッションの店である。

「青山健児はそんな店には用はない」とおっしゃる。御婦人、恋人同伴でぜひ探訪されることをおすすめしたい。きつとよろこばれること間違いなしである。

当の綾嬢、年は二十七歳、健康そのもの。女性ファッションに情熱を燃やすす経営者ではあるが、やはり女性、結婚が最終の夢とか。相手を求めている青山健児諸氏もぜひ乗り込んでみてはいかがでしょう。気力、体力それに男らしさ溢れる男性を物色中とのこと故。

(上杉記)

新聞等で既に知っている人も多と思うが、新校舍建築の土台工事やっていた八月四日金曜午前八時四十分頃、現場から砲弾や機銃が墜り出された。発見現場は從來テニスコートとして先生方やテニス部員に踏みつけられていた所であった。

発見された物はすべて自衛隊と新潟中央署が持ち帰ったそうであるが、その発掘品を書き並べてみよう。自衛隊では、手榴弾一五〇ミリ砲弾一、一五〇ミリ薬莢二、二五ミリ砲弾一、二五ミリ薬莢一、機関銃などの銃身二

「例えば、スーパードライエーには安価なドレスは多い。しかし選ばれたものを選ばれた人たちに着て欲しいと思う。最近の職業を持つ女性が多い。昼間の仕事を他に、レジャーや夜の生活をエンジョイするためのおしゃれを楽しんで欲しい。美貌を誇る綾嬢(在学中は「ミス新高」の名をささやかれていたとか)の顔もファッションを語る時は険しくなってくる。「お客さんに売ることだけを考えたお客さんにくつろいでもらえぬのは商売の邪道です。お店にきたお客さんにくつろいでもらえぬに気軽に寄つていただけるような店にしたい。」そのために彼女は月に一度は必ず上京して新しい知識と感覚を身につける勉強をして来るのである。二軒目の店、ブティックW-I-TプラスIはそんな彼女がつくりあげた都会的センスの漂う店である。ワコールやパリエインの商品を扱うこの店のお客には海外旅行経験者が多い。W-I-TとW-I-TプラスIはそんな女性ファッションの店である。

「青山健児はそんな店には用はない」とおっしゃる。御婦人、恋人同伴でぜひ探訪されることをおすすめしたい。きつとよろこばれること間違いなしである。

当の綾嬢、年は二十七歳、健康そのもの。女性ファッションに情熱を燃やすす経営者ではあるが、やはり女性、結婚が最終の夢とか。相手を求めている青山健児諸氏もぜひ乗り込んでみてはいかがでしょう。気力、体力それに男らしさ溢れる男性を物色中とのこと故。

(上杉記)

見発弾爆

提供 新潟日报社



(母校の新聞「青山」より転載)

三、小銃・機銃弾・薬莢一万一、五千。中央署では、銃身二、剣(〇)等。これだけの爆発物、危険物がその後どうなるのか少し気になる場所であるが、自衛隊は部隊に持ち帰った後、検査して爆破してしまうのである。また、中央署は一回廃棄処分する時期があるので、その時海中に投棄するそうである。

時々、新潟高校は狭いな、と思ふ。校舎が並んで敷地にゆとりが少なくなったが、授業のゆとりはなくなるまいではない。

しまれているのがこの「丈夫」である。しかしこの歌は新高でできたものではなく、旧東京高等師範学校(現筑波大学)の歌らしい。

C ただに血を盛るかめならば五尺の男子要なきも

高鳴る胸の陣太鼓
魂の響を伝えつつ
不滅の真理先頭へ
進めと鳴るを如何にせん

この歌は、旧制第四高等学校の「南下軍」である。四高では毎年京都帝大で開かれる全国高専剣道大会に選手団を送つていて、それを南下軍といった。(四高のある金沢から見て、京都は南である。)

「南下軍」の作詞者は高橋武清、作曲は梁瀬成一、この歌がいつ新潟中学校へ入つて来たか定かではないが、四高剣道部が連覇していた大正十一年頃ではないかと思われる。

D 今残星の影ゆれて
暁鴉の聲にほのぼのと
北陵城下の朝ぼらけ
固き守りの戸を破る
紅顔可憐の若人
胸の血潮に燃ゆるなり
嗚呼青陵に正気あり
青春の子が熱血の
双手にがさす紅の
護国旗の色君見すや
我当年の丈夫が
鉄腕撫して立つ所
信江の空運輝きぬ
覇業の栄に輝きぬ
空行く雁の羽音にも
脾肉の嘆きをかこちきぬ
飛べよ若人時至る

越路の風を翼に切り
以上の三曲については手掛りさえなかった。

G 天は晴れたり気は澄みぬ
正義の旗風吹きなびく
青山健児の血は迸り
此処に立ちたる選手団
この歌は各地で応援歌として使われているらしく、市内の舟栄中学校の応援歌になっている。

H えび茶の旗色にAの字は
白雲なびく青山
歴史は古く今もなお
無敵を誇る常勝軍
フレール新高フレール新高
フレール新高
中学校時代の野球部のユニフォームには胸に大きなAの字が入っている。これも戦前に作られた歌らしい。詳しくはわからなかった。

I 凱旋歌
強者等 強者等 強者 強者
君が勲はその胸に輝けり
今を今ぞ君勝ち我等は勝てり
この凱旋歌「つわもの」は新潟中学校時代によく歌われた応援歌であり、曲は「カルメン」の闘牛士の歌である。作詞は同校出身の伴純で、大正九年に応援歌となった。ところが、この「つわもの」は戦捷歌としてレコード化され、全国で歌われ、特に出征兵士を送る歌に使われた。

先輩から後輩へと歌いつがれて来た応援歌は青春の証である。今後とも新入生に、応援歌にこびりついている青春の情熱というものを伝えたい。

(青山より転載)

応援歌のルーツを探る

「青山」135号より転載

応援歌について、そのルーツを探ってみた。校歌と連い応援歌は自然発生的で、他校の歌を拝借したり、ある部の歌がそのまま、学校の応援歌に昇格したりしたのが多いそうだ。

A 霞たなびく青山の
松の緑の色深く
万古変らぬ信江の

銀蛇の流れ洋々と
濁世の塵も汚し得ぬ
汀に立てる健男児
これは、新潟中学校時代の歌で「玲瓏の天」が創立三十年を記念して、同校々歌として制定される以前、校歌代わりに歌われていたものだからだ。しかし、作詞・作曲者はわからない。

B 丈夫のたばさむ征矢の
雄風に草木もなびく
雲みだれ山とよもして
中原に雄鹿争う
新潟高校の応援歌として最も親

しまれているのがこの「丈夫」である。しかしこの歌は新高でできたものではなく、旧東京高等師範学校(現筑波大学)の歌らしい。

C ただに血を盛るかめならば五尺の男子要なきも

高鳴る胸の陣太鼓
魂の響を伝えつつ
不滅の真理先頭へ
進めと鳴るを如何にせん

この歌は、旧制第四高等学校の「南下軍」である。四高では毎年京都帝大で開かれる全国高専剣道大会に選手団を送つていて、それを南下軍といった。(四高のある金沢から見て、京都は南である。)

「南下軍」の作詞者は高橋武清、作曲は梁瀬成一、この歌がいつ新潟中学校へ入つて来たか定かではないが、四高剣道部が連覇していた大正十一年頃ではないかと思われる。

D 今残星の影ゆれて
暁鴉の聲にほのぼのと
北陵城下の朝ぼらけ
固き守りの戸を破る
紅顔可憐の若人
胸の血潮に燃ゆるなり
嗚呼青陵に正気あり
青春の子が熱血の
双手にがさす紅の
護国旗の色君見すや
我当年の丈夫が
鉄腕撫して立つ所
信江の空運輝きぬ
覇業の栄に輝きぬ
空行く雁の羽音にも
脾肉の嘆きをかこちきぬ
飛べよ若人時至る

越路の風を翼に切り
以上の三曲については手掛りさえなかった。

G 天は晴れたり気は澄みぬ
正義の旗風吹きなびく
青山健児の血は迸り
此処に立ちたる選手団
この歌は各地で応援歌として使われているらしく、市内の舟栄中学校の応援歌になっている。

H えび茶の旗色にAの字は
白雲なびく青山
歴史は古く今もなお
無敵を誇る常勝軍
フレール新高フレール新高
フレール新高
中学校時代の野球部のユニフォームには胸に大きなAの字が入っている。これも戦前に作られた歌らしい。詳しくはわからなかった。

I 凱旋歌
強者等 強者等 強者 強者
君が勲はその胸に輝けり
今を今ぞ君勝ち我等は勝てり
この凱旋歌「つわもの」は新潟中学校時代によく歌われた応援歌であり、曲は「カルメン」の闘牛士の歌である。作詞は同校出身の伴純で、大正九年に応援歌となった。ところが、この「つわもの」は戦捷歌としてレコード化され、全国で歌われ、特に出征兵士を送る歌に使われた。

先輩から後輩へと歌いつがれて来た応援歌は青春の証である。今後とも新入生に、応援歌にこびりついている青春の情熱というものを伝えたい。

(青山より転載)